

通航一覽

二十四

男

庫	文	閣	內
二七八函	二六册	三五三八一號	和書類

139
閣

內閣文庫	
番號	和 35381
冊數	26 (24)
函號	178 444

共二十四



周139

周禮卷之十七

考工記

考工記

考工記

考工記

通航一覽卷之二十四

琉球國部二十四止

目錄

一 漂著

一 漂流并異國入漂到

通航一覽卷之二十四

琉球國部二十四止

漂著



昔年より琉球船源名の時ふ何由よ
くも島津氏より海へ薩摩より帰
るはしりしり制度ふり

年代不明なり
慶長十五年以後

の事ふ多くは海防之計
異國船投言琉球船の條あり

慶安二己丑年七月六日唐船一艘薩摩より



山川揖尾郡源志又属以先下清高一と栞

面以球人と清知より後送あり

一和ふり八月松平島津薩摩島

光久より清色より寶永二證

乙酉年秋琉球人後河國清水浦下

安倍郡源志以延享二乙丑年夏一

陸奥國源志以室曆乙丙子年六月

乙未日肥前國五志下源志以

長崎下後送りより同下後為津

氏開後下同十二壬午年四月

乙二日薩摩國附大島下

録あり安永四年八史為源志の大島船取よりおせ

多漂著とり薩摩にりり援助

ありり為玉せ心安永乙未年下

月志麻子國為相浦下源志以文政

二己卯年二月十二日為陸國川尻村下

属
以 源公以同年六月十日水戸殿より松平

島津 中物齊興り家人ふり酒さるる

宝永二年乙酉此秋琉球人諸列清水浦より源公

以

大島筆札

延享二乙丑年夏琉球人色難風奥列へ吹付

此の依之陸より江戸へ来りて薩摩屋敷へ此酒の

由

用物筆領役

ウケウシテンバイキ
上運天親雲上

同筆者

イラヒミナ
伊良皆親雲上

同荷付交代役

コハククラ
古波藏親雲上

同

セナハククラ
瀬名波藏親雲上

上運天親雲上家来

ヒガキニヤ
比賀仁屋

ウヘマ
上向仁屋

シマフコル
島袋仁屋

續記海

以上

令城カナシノ仁屋

棚原タナハル仁屋

大城オホシロ仁屋

伊良皆親雲上家来

東忠納ヒコフシナ仁屋

内間ウチマ仁屋

鉢嶺ハチミネ仁屋

新垣アラガキ仁屋

古波藏親雲上家来

宮平ミヤヘイラ仁屋

瀨名波藏親雲上家来

山城ヤマシノ仁屋

美玄宗

元昌

宝曆六丙子年七月十七日乙未より当六月廿六日
五島領ノ琉球船ヲ乗渡人数拾六人令源忠由ノ
ト申シ取人当沖高辨島ノ前ニ挽來ル由ニ
相度ノ付松平薩摩守ノ役平田元右衛門ノ
相度之

長崎志

長崎年表奉要

宝曆十二壬子年琉球國潮平親雲上以下五拾
六人大浦浦源忠由ノ次男

一拾五端帆借取之被

但長崎志壬子年
横濱史七ノ守

以下潮平親雲上ノ主従

潮平親雲上シロバヤキヤシ

宜壽濱里之子親雲上ケズサトノシ

照屋墨之子テロヤ

潮平子シロバヤシ

上地ウヘヂ

家狀

同 東恩納

同 大田

多代 諸見里流登之

同 倚間流登之

僧 祖願

以下叙氏主從

船取 高良 西村

枕取 當向 久米村 年拾三

佐筆 具志 西村 年拾六

同 大城 西村 年拾八

同 赤吉 泉傍村 年拾二

同 平安名 西村 年拾二

同 高江洲 西村 年拾八

同 前里 渡が浦切邊が浦村 年拾四

同 新垣 西村 年拾五

定加子 照屋 東村 年拾六

同 山城 若狭町村 年拾三

同 島袋 西村 年拾四

同 手芝根 若狭町 年拾九

同 古波藏 淡志浦子切茶村 年拾八

同 喜屋武 度間味馬出間味村 年拾九

水々 富盛 西村 年拾六

同 手芝根 若狭町村 年拾三

同 大嶺 西村 年拾五

同 西平 西村 年拾九

同 石川 淡地村 年拾六

同 仲井馬 淡志浦子切茶村 年拾三

同 富里 淡志浦子切茶村 年拾九

按此らに交名の内富里口人ありまこと仲村渠三人ありまこと年齡村名等粗同しと記詳あり人

同 古波藏 淡志浦子切茶村 年拾二

同 新城 淡志浦子切茶村 年拾六

同 小嶺 淡志浦子切茶村 年拾七

同 同 同 同 同 同 同 同

令城 カト 浪赤浦間切阿波連村 年三拾三

平良 タイ 鹿間味方切阿波村 年貳拾八

仲村渠 ナカ 鹿間味方切阿波村 年貳拾三

當間 トフ 鹿間味方切阿波村 年貳拾三

仲村渠 ナカ 鹿間味方切阿波村 年貳拾九

富里 ホ 鹿間味方切阿波村 年貳拾貳

新城 アラ 浪赤浦間切阿波村 年拾九

富里 ホ 浪赤浦間切阿波村 年貳拾二

同 同 同 同 同 同 同 同

平良 タイ 鹿間味方切阿波村 年三拾二

宮平 ミヤ 鹿間味方切阿波村 年貳拾四

平良 タイ 鹿間味方切阿波村 年貳拾一

慶苗間 ケ 鹿間味方切阿波村 年貳拾九

喜屋武 キ 鹿間味方切阿波村 年貳拾八

渡慶須 ト 鹿間味方切阿波村 年貳拾三

富里 ホ 鹿間味方切阿波村 年貳拾九

仲村渠 ナカ 鹿間味方切阿波村 年貳拾九

和頭産

十ロニ子 若狭町村
長嶺 年三拾九

右宝曆十二年四月廿六日平流球那霸の湊を

出同必運天の津よ入る 自江那霸より二十里餘の平流

る此敷 天守愈く毎夜お度りし七月十三日運

天を以て二十五日の晩より十六日よく大風よ

多し櫓切流し舵折れ荷物大ましくひ屋久

島と 自江屋久島ハ薩摩山 入るをくみ入りし

西南風あしくまらる己し論没せしとせし奉

方となり幸ありし二日之辰子丑の方へ流る

舵も折れし中舵り切まふとを船へ付いし世

兎角しつぬく音此中に島山とつん付ぬ何

走も何國やしと疑いしつぬく潮平溜る山乃

田い中帯の花よらんあらし形中し十九年平

自江延喜 元甲子年 奥列へ流るれしと見ふりしつん

そ人あり 自江山 城ふり 一時分流るしつん

方角彼是と考へるよ多くは日中同必運の地

とくそ船とを貢船とくし進貢船ハ矢舎と揚げ
狭弓と弓け砲と並り鉄砲と備ふ是海城の
用心ふり進貢船ニ之が役用いしハ矢舎と除き
狭弓と寒と格船とくし名目ハ威琉球王の官船
とく薩摩之の海軍船とく去先格船とく去
より去る夏立格船とく去夏より去る冬とく去る
つし船本陣の官軍御地之邑の故より是琉球國
王の申より公報の存物多くとぬれとも法

取ハ恙なく持つも禮日等よハ神下飾りの格船薩
摩へ通入る海城の患もかくとく薩摩より
制禁もあつた故に狭弓と寒と武意の備る船中
用心の爲よ刀を揚を入るを改切るあり九月廿日
首途の由夜とく由料程もさしける夜彼是由
然意の至此が此由身も志由程もやわしとく
とく収合りも程なく帰國人

大島筆記 ○按らるるに文中薩摩より到るの事不申ふけ
れども結文を申すくし到るより扶助ありし事持

く知る

ア

安永曰乙未年二月志列島羽浦ノ琉球人漂

ル

近世東西異史

文政二己卯年二月ノ日常列多河の郡川鹿村

漂之の琉球人由と尋ルノ十二日雨中早天ノ川鹿村

海面汀を漕入船の繋り場何と可直成と仕敷と

以漢船ノ向ハ由漢船又と尋ル大畧ノ様アリ

崎拾遺ノ一由史ノリ吳國人ハ人陸ノより店

屋前ヲ東ノ宅ノ尋ルノ日中ニ茶と茶とい

ハ由ふり時ノ七千ニカノお來ハ茶母有とい

テナンチヤと申ハ由店屋の妻ヲヤと尋ルハ

いづつハ由と申ハ由七千ニカノと申ハ

もヲヤと申ハ由と申ハ由と申ハ由と申

我と茶ノ一事ノも可なりと申仕敷と尋ルハ

群猪ノ事ノ有ルハ由茶をカハハ茶を

へ式禮有く茶と飲れ稚子此方り人よ是る事か
し何そ給へいやと申し之ふふ稚子よ付仕敷よ
てんせいのぬきと極悦いの稚子んえうふより者
もたかくてと申しふにシテチヤカラと申し申以罪人り
中き人の船以南流と申しとのよき此りのごらつり
日本の河をきいぬふりち源之のち源流人より
若むい海状

寛

初春意水く養中心五年一貢米積載用八
重山流らお酒り年貢積入同日月十六日彼
島より出帆仕ぬ交次十七日重天風候日本
本波と波打ち十九日一生とく難お來大橋切
控風糧南西地源之仕申し官改之係付可
事下知候と

琉球船

泉清村渠流登之船

卯二月十日

南流布

市平丸をよく此方の平にお遠き山俣麻抹なり

- 一 吏より石井官府へ許しお米初十日未明より川尻より相法郡吏清水お石井の國津波お扱を旗部等の儀も本意を承調役市村仁右衛門等指人お徳別官後と石井改修水お指き人川尻村の官の炭焼明と居いと重根とふとく人野將と徳一の官より本戸を作り徳役人番よりく一月月十八日とて出来是へ為引並い也扱又石井より

後日後十日より水府船足此人々先鋒お萩登之助様山をた束つ紐の同心各貳拾人々監曹川方佐右衛門吏館より筆法くく大竹をき徳字儀英久の序皆宜候とふ別川尻にお借也

- 一 吏より船より山崎橋入の儀お号と改不致此方引揚此中橋入の足お葉小麦玄米お有り由
- 一 吳國船より琉球國泉崎村仲村渠築登之と中者のおより船改東村南銘と一甲午三水より

同村^{ウニキチ}と一平^{タニクスミ}之城と一平^{タイジヤウ}之大城と一平

又比^ヒ嘉^カ年^{トウタイ}一平^{ミヤシロ}七^{シロ}島^{シロ}袋^{シロ}年^{シロ}一平^{シロ}一^{シロ}宮^{シロ}城^{シロ}と一平^{シロ}九

令^{キン}城^{シヤウ}と一平^{コハカハ}二^{シロ}小^{シロ}橋^{シロ}川^{シロ}と一平^{サシヤウ}一^{シロ}心^{シロ}城^{シロ}と一平^{シロ}二^{シロ}高

江^{ヨレカス}列^{シロ}と一平^{シロ}四^{シロ}口^{シロ}赤^{シロ}敷^{シロ}と一平^{シロ}八^{シロ}以^{シロ}と一平^{シロ}二^{シロ}人^{シロ}船^{シロ}八^{シロ}五^{シロ}反

帆^{シロ}馬^{シロ}艦^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

十六^{シロ}日^{シロ}八^{シロ}重^{シロ}山^{シロ}島^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

子^{シロ}相^{シロ}三^{シロ}十七^{シロ}日^{シロ}大^{シロ}風^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

風^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

梅^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

北^{シロ}風^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

王^{シロ}大^{シロ}英^{シロ}殿^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

入^{シロ}れ^{シロ}一^{シロ}是^{シロ}又^{シロ}漂^{シロ}流^{シロ}の^{シロ}中^{シロ}に^{シロ}残^{シロ}海^{シロ}中^{シロ}に^{シロ}投^{シロ}入^{シロ}此^{シロ}等^{シロ}は^{シロ}送

状^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

状^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

計^{シロ}と一平^{シロ}一^{シロ}取^{シロ}由^{シロ}清^{シロ}知^{シロ}赤^{シロ}磨^{シロ}二^{シロ}千^{シロ}四^{シロ}年^{シロ}卯^{シロ}日^{シロ}月

送状

所用意沙蔵

粟^{シロ}信^{シロ}石^{シロ}六^{シロ}年^{シロ}七^{シロ}并^{シロ}六^{シロ}合^{シロ}六^{シロ}夕

但去儀舟送子計船入より七式蓋小舟

又舟舟目八指三行儀皮九行

右舟用定為舟物多配分七心九反帆馬艦取之象

傍村仲村渠流定之之取以當船取より積定也

運賃米之定不之取酒一也取之

卯四月十七日

住世後持海目取

譜久心也や取

仲間共人取

右通右邊之舟度心取之

八重心取

右垣親雲上取

同

大深親雲上取

同左番取

湖平之親雲上取

同左番

具志堅親雲上取

右身重定心取也

同左番

森金場親雲上取

卯四月十七日

舟物在舟取

按より八重心取出帆と四月十六日と死して此
送候より七のあふ時日舟合世以始疑と取也

一 人物皆柔初よわんん發ハ平生文才長く高
る由よい約大流流き苦く固く神明と
初つる各皆よたら浩い由也流方此心伏のよ
まとい居ん也百来流一懸誓一有く如明約放滅
の後今此流約北秋の流亂と中華と稱一風信と年
め皆前弁の流海よ成ん舟流球人とも是非よそ
風信よ改めんと命令よ付不約此の中と指とそりい由
今中とりと約いふり志一懸誓相んんん

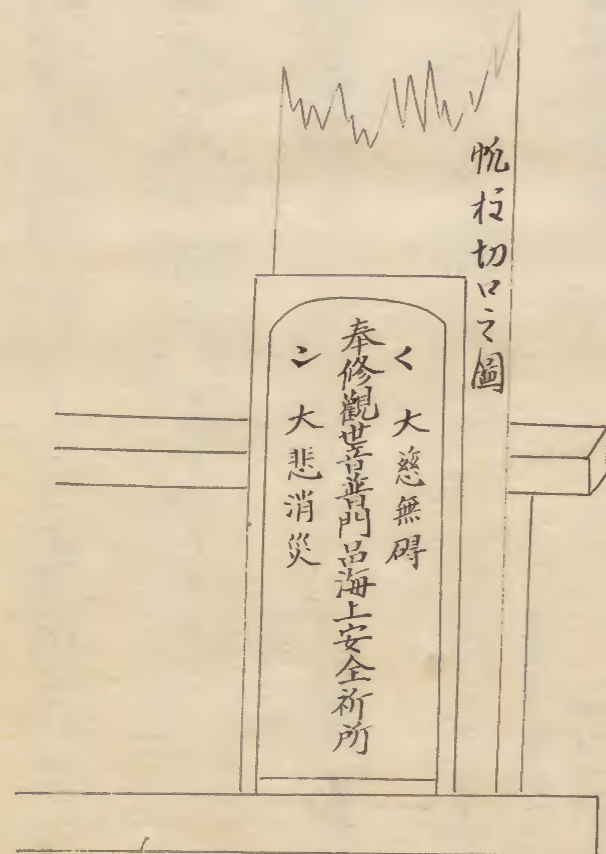
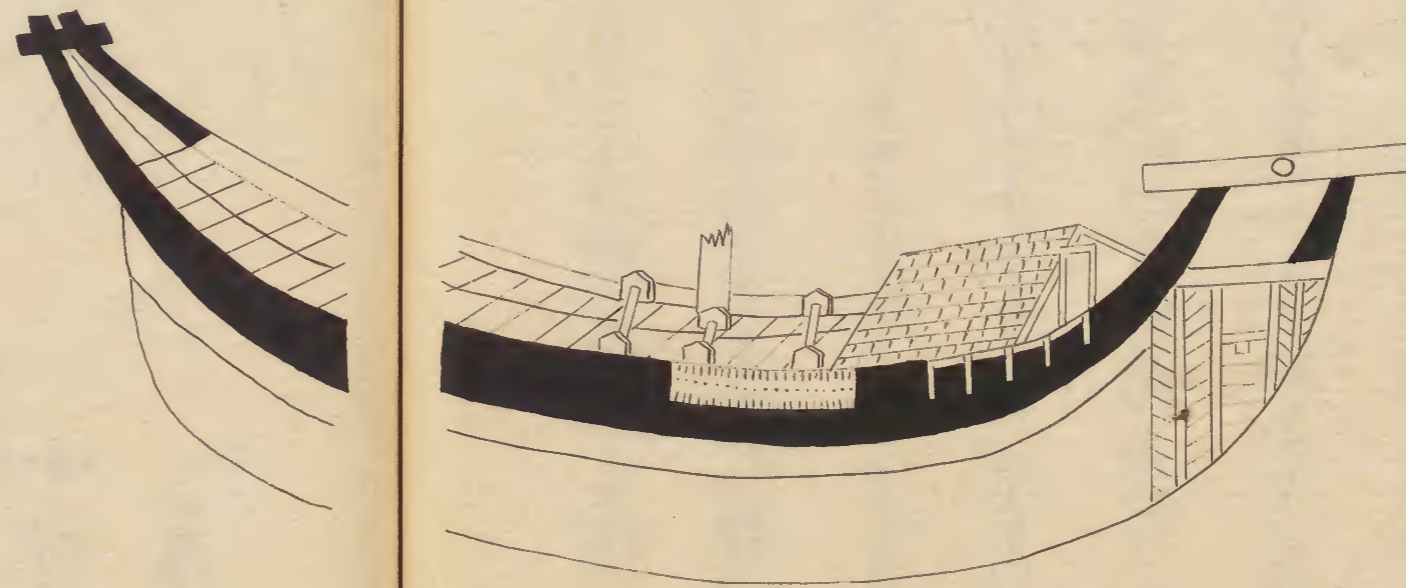
一 衣裳ハイセウと唱へ皆かじりよくゆるり
申玉粒の麻布ふりはきよあがりよと廣くし
て一面幅廣よ流えん帯ハ一もものよとあり
なりよ帯よくあ勝よ流いとけちよよ
の流るる物と腰よ掛て居んふり
一 積入の流るる今後とつる後或り今後ハ一うり
有く申よ後ハ流方此方よよ心と行と一後よ
がし流り大流似るい申丹後とく入る補芭蕉

繩二房砂仁繩或房白米とく人とく石りく傳り船を
艘味増盡とく何葉徒とくう船とく引よんかど
つる之並いし繩せりて人位よんえ木の
皮とん制しん花子番葉もおく者くさり
是と砂仁繩とくしん式

一 船長と船頭と船員と船主とを以て人清
紙福建別の船よ似るものを別方制作して藤
抹しとく危花よおんえの帆柱ニテ中一とくえ

ゆり附者船よあり竹とかを附しよん
張る花子面根中條通り之丈程明とくを
木と帆板よかけらとく次よかけ湖除り
花子船よん灰ゆりよんをあり船よ
葉板よ白とく月れめとく丸あり水つぎ石
灰塗り板板矣る事よふけ左右よ葉
研の縁りゆく固く帆板押の木よ板板あ
る製善のれふり

船之圖



同年六月十日薩利より右漂流人連の没人
川尻一也八日江戸おちり申

高百石

馬廻り
日本孫左衛門

上下六人

高百石

苗字右衛門
河野新次郎

上下五人

高百石

目付没
小田吉玄坊

上下五人

一人船指六人

琉球人漂流圖見図説○按らるに江戸
辺を乃い洋國の月日号とありしなり

○漂流并異國人漂到

舟
呂轉三人

本邦の船琉球より漂流の時に薩摩より送り

唐國乃い朝鮮の船ハキム中國より送水方

舟船之なり
自餘の異國船ハ薩摩より送りしなり
長崎より送水方例あり長崎見書

一載り寛永十四年一漂到
北東航より志しなり

將軍家よりこの御提よりなる御辨の船は御
送り日本の船ハ薩摩へ送る事ふり紅毛鞋組
此船又舟より御提あらざり

大橋筆記 ○按るるに此書ハ薩摩戸部良愷室曆十二年薩
摩領大橋源兵衛より琉球人湖平親雲と号しよりなる筆
記なり
かり

某年 薩摩國の船琉球運天港より漂流

大橋筆記 某年代と記せしむるに其年より安永十二年
大橋源兵衛より湖平親雲と号しよりなる筆記より少く湖平儀
國よりより琉球人を採ひしより記せしむるに
室曆十二年此事あり論るるに

安永三年

本年二月十日より一尾張り廻糸流琉
球薩摩より左番の士二人出く漂流の
船を尋問し枝養と加へ上陸を許せ
しにして薩摩より送りたるより大阪よ
り後送りあり後尾張殿より彼薩士二人
より謝物を贈るる

琉球運天の津へ契別船原より湖平親雲と
を御方より系り首里より二十里の所

つと別れの之徳通——このこふは運天
此者と同じ琉球人ふれも毎——くは是
不自由あり——語なり

大島筆記

尾別の島人より大坂廻船と持しあり

自江長老所
紙屋様書

が船は尾別の島様所
改め船名は五歳手外九人

元禄安永二癸巳年一月十日

九日米乃い枝木と積く城島船川より出船

一志別名廻船

自江長
老一日

日初辰こんくとも

つと別れの島人の浦へかつとまじり大坂へ志
く繋りぬく 自江長
老一日 明方より風——
てい——くは吹散され浪またく——
港とち——船三回艘志——くみ——の切
も初——ぬたり九人繋りし船の者と
も消ふし——命つ——二十日は
つと海より日と送り——風静り——磁石針
と心く考ふり——月と大島山の方よぬ

板のうしろのふきも南海とよむ心かきく
仏ふんととむしあめくは陸地あはくは
く氷をのこせせくううふあらしと新
ぐるのふく天さるる鳥居れとくす
黄り相の鳥居の色よしつとく大よそ
一丈口も天もありのふしとらん中らう二相来りて
取よとらまら板ら鳥居とあしとらんそらうれた中
よと板くく米あはくくあはくあはくは

よとくしあらしはもふくくしと板さうあはく
又来らるはより海の中も静よあはくくあはく
暮春のこくくくくくくくくくくくくくくく
のちよ心くくくくくくくくくくくくくくく
くやあはくしとく板らもくくくくくくくくく
かはくくくくくくくくくくくくくくくくく
よ一地よふりつとくあはくくくくくくくく
字のよや琉球出ふる事とくくくくくくく
字のよや琉球出ふる事とくくくくくくく

をとりよ甲午

按るに即ち
永三年ふり

三月廿四日

之船の漂流しし由を述懐ししと云く日本國

より指さく番もよ告るしと云く食物を送り

てししゆりかきし薩摩侯の家人 自改修合
を解し

田島
市之島 事此流舟を問いし事をも増船中しし

至る船のまじりし塩漬いし漬よありし事

ふし毒也 自改修合
と云ふ ありし人とそこふし

がし利しし日しに飲食を送りしし

そふしは甚いゆりし事と云く秋よむりぬ

七月廿日お船し薩摩しし心川の澄りし

つさぬ交しし候り命しし船を修し大坂

よおくり候し

九人の内一人の船中しる事し薩摩しし

船よりいあめさりしし盃盃の日し

いよ更しをく寺院しし船中しし

死せし者の追福ふし

十月尾別へ帰る来る三月廿八日我公より

按らるる
尾張守

薩摩の家人依合氏号より時彼ニッ賜り一乞
ハ琉球より一源和の者ともいひつりつり一乞
とふんゆえ

後尾

寛永十回丁丑年一琉球より南蛮船一艘
漂到ハ利薩摩より来りつり一乞
長崎より送り獄より出らる寛永三丙戌年

九月二日松平

為津

少将台より送り五月大

島より漂出北河内院人信元利重人と長
崎より獲送あり享保二十乙卯年十月
十一日朝鮮船永良部島より漂到其地ハ帆
一として一夫島より漂出せり一明年元文元
丙辰年一月二日彼島より船帆せり一
与同年六月廿八日松平 為津 中將継ぎ
老臣より長崎奉行の細井周悳より一返を

以て後清和の和を源朝に

又為筆記より
十二年前との

とありて十一年代を記すは若しこのころに不室暦十二年
より算へしふれば元文元年寛保元年の号ありて

寛永十四丁丑年琉球を和を艘源朝に

薩摩へ送り來薩摩より長崎へ送來列入

籠に付付い

長崎宿人書

寛永十四年八月十日日本に紙一冊の南蠻

和を艘琉球へ漂出に薩摩番への捕

つては連綴しに早速長崎へ送しし布り付天

連六人日本に二人也その馬場を在るつ原

船詰り詮我者とい知日本に物系といは心

とさしめよ志のいく来りし白状に依之長

崎の牢よ入おし落出ら不明なり此時九別

中よ出とれい清を書畧る

古集記

長崎東船細見録

宝永二丙戌年八月琉球の内大島と申す

五人六人源氏松平藤原等殿より長崎に送り
九月二日名取守の布より津詮儀有り
三人等エケレス二人ハランダ人より疑義候
イスペインヤハ捕波國を逃去アソントヤ新より漂流
い〜い〜

承寛襟縁

元文元丙辰年六月廿八日松平大隅守老臣より
長崎守の細井因幡守人波を

一葉書上江の琉球國の内永良沖島より去年
十月二日英國小船を獲波源氏郵船の付早
速没人等五名出見の如男十八人女十人内武
人等知雅名系紐朝鮮人等似方ハ源氏公
次等出見等相尋ハ切有云語文字相通下中
ハ就ハ朝鮮人等ハ候名ハ何得漢和遣送ハ風
源氏ハ解ハ和具衣類ハ外様候モ云ハ候
米拂底ハ和食物ハ有百宗ハ候ハ政ハ知

何者疑其後之... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...
 舟中... 舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

六月廿八日

塔 回舟大吏

真昌判

種子島彈正

久基判



公事餘業

本唐の船も二十二年お琉球へ渡りて
時唐船へ逢ふる石灰の仕来と云ふ事
琉球へ

細井周慎

系人

島津木工

久家利

島津至敏

久貫利

く年より石灰より仕来かりり有る事
取の為要也よふ事

大瀧筆紀

